邦俗醫掘採山茶根以充椿根皮用甚誤、殊無寸功、與椿樗條可參考、

〔日本書紀七景行〕十二年十月、與群臣議之曰、今多動兵衆、以討土蜘蛛、若其畏我兵勢、將隱山野、必爲後愁、則採海石榴樹、作椎爲兵、因簡猛卒、授兵椎、以穿山、排草襲石室土蜘蛛、而破于稻葉川上、悉殺其黨、血流至踝、故時人其作海石榴椎之處、海石榴市、亦血流之處曰血田也、

〔萬葉集一雜歌〕長皇子御歌

吾妹子乎、早見濱風、倭有、吾松椿、不吹有勿勤、

〔萬葉集十九〕三日〇天平勝寶二年三月守大伴宿禰家持之館宴歌三首

奥山之、八峯乃海石榴、都婆良可爾、今日者久良佐禰、大夫之徒、

〔花壇綱目下〕椿珍花異名の事

椿種類

玄ら雲 白き八重に赤飛入	雨が下 白八重の大輪赤飛入	いづも椿 白き八重に赤飛入	人丸 白の八重大輪なり
つるが玄ぼり 地白く紫の地ぼり也	本因坊 千よの赤大輪なり	まつかさ 松かさしぼりの大輪なり	そこつ 白の八重にあか飛入
國玄らず 地薄色の八重に赤飛入	松かせ 大輪なりしぼりの	むら雨 白き八重に赤飛入	と宮 白き八重に赤飛入
八幡玄ぼり 赤き八重の大輪	舟井待 赤き八重のすじ椿なり	國づくし 白き八重に赤飛入、大輪	竹生島 白き八重に赤飛入
ひの玄た 白き八重の大輪なり	あさ日 白き八重に赤飛入	八幡飛入 赤き八重に白の飛入	大はく 白のうへ重なり大輪
青こしみの 白の八重の咲の大輪	大白玉 白き壹重の大輪也	ほうくわ 白き八重に赤飛入	うぐひす 赤の八重咲輪なり
ほとゝぎす 白き八重に赤飛入	きぶね 白き八重に赤飛入なり	大いさはや 赤き一重の大輪飛入	いわた 白の八重大輪なり
なぎのみや 白き八重に赤飛入	妙義院 赤き千重白き飛入	奈良の都 白き八重に赤飛入	玄ら菊 白き八重の大輪也
清がんじ 白き八重に赤飛入	參國 紫の八重赤飛入はた白	壬生万よ 白に赤の飛入	玉玄ろ 大輪なり
光とく寺 赤き千よに白飛入	めい山 白き八重の大輪なり	せいわうぼう 薄いろの八重也	ちんくわ 白き八重に赤飛入
大つま白 地薄色の八重に赤飛入	京飛入 花こしみの大輪也	千本飛入 赤き白飛八重入	をぐら 白き赤飛八重入